住宅セレクション
Vol.4
一般社団法人 東京建築士会 編

Housing Selection
Vol.4
Tokyo Society of
Architects & Building Engineers

かしこい家

募集要項

住宅セレクション Vol.4
「かしこい家」

主催：一般社団法人 東京建築士会
企画：一般社団法人 東京建築士会 青年委員会
後援：公益社団法人 日本建築士連合会

募集対象

新築・増築・改築・模様替え・修繕等を行った住宅。用途転用により住宅になったものなど。形式（戸建・集合）は問いません。

- 実現している物件。竣工時期は問いません。
- 実施を前提に企画・提案したもの。

審査員（敬称略）

- 小泉雅生（建築家／首都大学東京大学院教授）
- 馬場正尊（建築家／東北芸術工科大学准教授）

賞

応募作品のなかから20作品程度を選出。各審査員賞のほか、入選者には賞状を授与します。

※ 入賞作品展を実施します。
※ 入選作品を収録した書籍の出版を予定しています。

応募資格・条件

1 建築士法に基づく建築士で47都道府県のいずれかの建築士会正会員であること。
※ 作品提出時までに入会手続きが完了した方を含みます。
※ 連名による応募の場合、表彰対象は建築士会正会員に限らせていただきます。
2 応募する住宅の居住者および所有者の作品応募に関する承認を得ていること。
3 複数点の応募も可能とします。
4 応募者は、応募作品の著作権保有者であること。

応募手続き

1 日程
登録期間：2013年7月16日（火）～2013年9月23日（月）
提出期間：2013年9月19日（木）～2013年9月26日（木）必着
2 応募登録方法
ホームページから応募登録を行ってください。
http://www.tokyokenchikushikai.or.jp/selection2013/
3 応募方法
提出期間内に応募必要書類をまとめて提出してください。
提出物の受付および問合せ時間は、平日の10時から17時までとなります。
4 応募必要書類
- A2サイズ（420mm×594mm）横使いの作品1枚
  ※ パネル化はしないこと。
  ※ アルミフレーム等には入れないこと。
- 作品データ（PDF形式）を入れたCD-R 1枚
- 作品のA3サイズ（297mm×420mm）縮小コピー1枚
- 登録者証（所定の書式A4判）1枚
  ※ ホームページから入手できます。

5 応募作品内容
応募作品には、次の項目を盛り込んでください。
- 作品名称
- 設計趣旨（400字程度、文字サイズは12ポイントとする）
- 設計意図を伝えるために必要と思われる図、写真等（表現方法は自由とする）
  ※ 個人を特定する氏名、組織名等は記載しないこと。

6 提出先（応募に関する問合せ先）
〒104-6204 東京都中央区晴海1-8-12 晴海トリトンスクエアZ棟4F
一般社団法人 東京建築士会 事務局
TEL：03-3536-7711
FAX：03-3536-7712

入選作品の発表・協力要請

- 作品選考は非公開とし、選考結果に関する個別の問合せには応じないものとします。
- ホームページにて入選作品を発表するとともに、入選者には入選の通知を行います。（2013年10月末予定）
- 入選者は、入選作品展におけるパネル・模型等の作製にご協力をお願いします。
- 入選者には、出版書籍編集のために作品資料等の提供（無償）のお願いをすることがあります。

《参考：発刊実績》
- 住宅セレクションVol.1
  『藤森照信×伊東豊雄の住宅セレクション30』
  （2006年エクスナレッジ発行）
- 住宅セレクションVol.2
  「家の風景・風景の家」
  『建築家と考えるセカンドハウス』
  （2008年エクスナレッジ発行）
- 住宅セレクションVol.3
  「更新する家」
  『更新する家　リノベーション住宅大研究』
  （2011年建築資料研究社発行）

著作権および応募作品の取扱い

- 応募作品の著作権は、応募者に帰属します。
- 写真データ等の使用については、撮影者の同意を得ておいてください。
- 応募作品は、理由の如何を問わず返却しません。
- 応募作品の公表および出版の権利は、主催者が保有します。
- 応募作品に含まれる個人情報は、本会個人情報保護方針（ホームページにて公開）に基づき、適正に管理します。

この企画は、公益財団法人 建築技術教育普及センターが実施する「平成25年度第1回普及事業助成金対象事業」となっています。

CONTENTS

2 募集要項　住宅セレクションVol.4「かしこい家」

対談：審査会を終えて

4 与条件を解く
建築家の知恵=かしこさ
小泉雅生×馬場正尊

住宅セレクションVol.4「かしこい家」

11 入選作品

八ヶ岳の山荘	MDS
béret	y+M design office
マチノキ	半谷彰英建築設計事務所 +ウタグチシホ建築アトリエ
長岡の住宅	フューチャースケープ建築設計事務所
ホワイトアトリウムハウス	小山将史建築設計事務所
minomushi house	楓設計室
食べる屋根葺き「家畑」	設計アトリエ+ホルツストラ
ツボミハウス	フラットハウス
カウルハウス	ikmo
バスキッチンの家	鹿内健建築事務所
passive/active	エトラ
Haco	KINO architects
つくえの住宅	ココアデザイン
たまらん坂の家	MDS

52 設計者PROFILE

東京建築士会 Selection

54 かしこさUPのための建材・工法

内装材	レスト
内装材	朝日ウッドテック
内装材	テツヤ・ジャパン
ウィンドウ・トリートメント	あかりカンパニー
屋根材	ディートレーディング
外壁材	ニチハ
冷暖房設備	ピーエス
浴室設備	大和重工
地盤調査	ビイック
基礎工法	タケウチ建設

64 あとがき

対談：審査会を終えて

与条件を解く建築家の知恵＝かしこさ

小泉雅生（建築家／首都大学東京大学院教授）
×
馬場正尊（建築家／東北芸術工科大学准教授）

小泉雅生　Masao KOIZUMI
1963年生まれ。88年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。86年シーラカンス・一級建築士事務所設立。88年シーラカンス・アンド・アソシエイツ（C＋A）に改組。2005年小泉アトリエ設立。現在、首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域教授。建築作品に「アシタノイエ」（04年）、「象の鼻パーク・象の鼻テラス」（09年）、「宇城市立豊野小中学校」（13年）ほか。著書に『パブリック空間の本』（彰国社刊 共著 13年）など。

馬場正尊　Masataka BABA
1968年佐賀県生まれ。94年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂、早稲田大学博士課程、雑誌『A』編集長を経て、2003年Open Aを設立。都市の空地を発見するサイト「東京R不動産」を運営。東京のイーストサイド、日本橋や神田の空きビルを時限的にギャラリーにするイベント、CET（Central East Tokyo）のディレクターなども務め、建築設計を基軸に、メディアや不動産などを横断しながら活動している。

バリエーション豊富だった作品群

小泉　「かしこい家」というタイトルは、いろいろに解釈できます。このコンペはアイデアコンペではなく、既に手がけた実作を応募するものなので、自分の作品に対して「かしこい」というキーワードをどう重ね合わせるか、という取り組み方だったのではないかと思います。応募案のなかには無理やりこじつけたものもなくはなかったですが、多くの作品ではかしこさがそれぞれに読み取れた気がします。住宅における「かしこさ」のいろいろな可能性が見えてきました。

馬場　僕も似たようなことを感じました。審査にのぞむにあたって、何をもってかしこいというのか、その解釈が難しそうだな、と思っていたのですが、70あまりの応募作品を見ながら、「こういうかしこさもあるな、これも確かにかしこいと言えるな」と、かしこさのバリエーションが少しずつ広がっていった感じです。

小泉　多様なかしこさがあるのですが、入選作を決める過程で作品の傾向としていくつかのサブテーマも浮かび上がってきました。

馬場　「狭小」「リノベーション」「ライフスタイル」「環境」「周辺との関係」の5つですね。そのテーマごとに入選作を振り返りましょうか。まずは「狭小」から。

5つのタイプに見る“かしこさ”

type 1
狭小

つくえの住宅 ……fig.1

馬場　幅が4m、奥行きが10mぐらい。都会ではよくある狭小敷地の形です。そこに立っている建物の真ん中に、細長いテーブルがまずあって、その下の床が上がったり下がったりしています。テーブルと床の関係によって、そこが

fig.1
つくえの住宅
三戸 淳＋三戸美代子
（ココアデザイン一級建築士事務所）
>> p.48

fig.2
たまらん坂の家
森 清敏＋川村奈津子 （MDS）
>> p.50

fig.3
ツボミハウス
坂野由典 （一級建築士事務所 フラットハウス）
>> p.34

食事をするところになったり、子どもが勉強するところになったり、作業をするところになったり……。1つのテーブルの上で、いろいろなことが行われています。設計プロセスとしては、テーブルの天板が基準線となっていて、床の方を動かしたようにとれますね。家具が建築を設計するきっかけになっているというのもおもしろい。

小泉　1枚の天板と変化する床レベル、それだけでたいがいのことに応えられるというのは、なかなか鮮やかな回答ですね。

馬場　このテーブルに設計のエネルギーを集中させていますよね。逆に建物の外観はきわめてシンプルな形をしています。そっけないと言っていいくらい。

小泉　外側に現れるボリュームは法規による斜線制限で決まると割り切っているようです。制約のある敷地条件でたくさんのことはできませんから、これはこれでかしこい手法です。

馬場　審査でも、条件が厳しいなかで建てられているものを選んでしまいますよね。かしこくないとクリアできない条件のなかで生み出された家。そこに建築家たちの知恵を見ることができる。これはまさにそういう住宅でした。

たまらん坂の家 *fig.2*

小泉　スペースの有効活用。床下や天井裏を、巧みに使い切っています。

馬場　ダボで組み立てる棚みたいな断面だな、と思いました。棚の感じを出すために、床の木端をスパッと切ったように見せています。そのディテールでコンセプトを饒舌に表現していますね。

小泉　天井高は低いでしょうね。普通なら2層しか入らないところに、5層のレイヤーを入れています。

馬場　スケールが一瞬、わからなくなる断面ですよね。

小泉　ところどころうまく抜いているので圧迫感はないのでしょうけれど。

馬場　斜めに視線が抜けていくように、上手に計算していますよね。これだけ床が見えていても、うるさい感じはない。

小泉　とくに少し掘り込まれたソファのスペースが気持よさそうです。身体にフィットする感じ。

馬場　僕自身は必ずしも狭小住宅に賛成ではないんですよ。狭いところに戸建ての住宅を建てて住むのはエネルギー的にも非効率だし、とくに都会では集合住宅にしてまとめて住んだほうがいい。マクロの視点からはそう言えるのですが、この住宅のソファまわりを見ると、チマチマとした家具的な空間のなかに身を置くことの心地よさもあるなと感じましたね。マンションだと断面に制約があるので、こういう立体的な視線の抜けがないわけです。

小泉　伝統的な日本の町家とも共通する感覚かな。

馬場　そうですね。こういう設計ができるのは、日本人だけではないでしょうか。家具的なスケール感を用いて、空間を折りたたんでいく。

小泉　ただ収めるだけではなくて、きちんと空間をコントロールしています。住空間を家具的なレベルでコントロールするというのは、独自の技術ですね。

type 2

ライフスタイル

ツボミハウス *fig.3*

小泉　次は「ライフスタイル」をテーマにした作品群です。「かしこい家」を考えるときに、家のでき方だけではなくて、そこに暮らす人のライフスタイルに着目してもいいはず。「こういう生活が行われるからこういう建築なんだ」という作品ですね。

馬場　住むだけではなくて、違う目的や行為が介在したときに発生する家ですよね。かつての住宅は、住むという単独の機能しか持たなかったのですが、これからは働くことだったり、売ることだったり、育てることだったり、そう

fig.4
食べる屋根葺き「家畑」
瀬野和広（設計アトリエ一級建築士事務所）
＋稲山正弘（ホルツストラ一級建築士事務所）
>> p.32

fig.5
バスキッチンの家
鹿内 健（鹿内健建築事務所 一級建築士事務所）
>> p.38

いった行為がどんどん介入してくる気がしています。その先行的な事例が、このクッキー屋さんの家です。楽しそうですね。

小泉　最初はインターネットを通じて販売していたようですね。それがやはり店がほしくなって、自分の家のリビングを外に向けて開放してしまった。

馬場　住むことと都市に開くこととが融合して、家のなかにいろいろな人がいる状態。かつての街なかの住宅が備えていた半ばパブリックな空間が復活しているとも言えそうです。

小泉　インターネットにはかつてのマスメディアとは違う発信の機能があるけれど、この店はそういう情報環境を前提にしていますよね。敷地も、大きな通りからはかなり引っ込んだところにある。

馬場　そうですね。昔は商売をやろうと思ったら、商店街のようなエリアでないと成り立たなかったのですが、今はインターネットの情報を頼りにお客さんがピンポイントで来てくれるので、裏路地にひとつだけある店でも商売が成り立つんですよ。

小泉　でもクライアントは、インターネットで売るだけではおもしろくないと思ったんですね。建築の存在意義を、あらためて感じさせてくれるエピソードですね。

馬場　情報システムの発達によって、人と人が会わなければいけない機会が逆に増えていくんですよ。

小泉　「かしこい家」というとなんとなく、IT機器を使って生活をコントロールするスマートハウスみたいなものをイメージしそうだけれど、むしろこういう家こそインターネット時代ならではの「かしこい家」なのかもしれませんね。

食べる屋根葺き「家畑」 *fig.4*

馬場　これはインパクトがありましたね。

小泉　家庭菜園を住宅に持ち込んだものです。玄関の脇にそれがあります。不思議な構成ですね。家庭菜園というと、普通は裏手に持っていきそうなものですが、ここでは、訪れた人がまずこの階段状の畑を見ることになっています。

馬場　畑を立体的に立ち上げたことが、住宅の新しい表情をつくっている。そこがおもしろいと思いました。

小泉　オーソドックスに、建築と畑とをそれぞれつくるという回答もあったのではないか。でもそれをあえてせずに、建築と畑を重ねている。そこに建築主と設計者の強いこだわりがあったようです。

馬場　無意識を表出していると見ることもできます。近年はオフィスビルや公共施設で屋上緑化や壁面緑化が盛んに行われていますが、それは都市や建物それ自体が危機意識を感じて、自然に回帰しようとしているようにも見えます。それが住宅レベルでもこういう形で表れているのかもしれません。

小泉　この畑の下はどう使われているのでしょう。道具置き場でしょうか。

馬場　必ずしも合理性があるわけではなさそうです。そういう意味では、かしこくはない（笑）。

小泉　合理的ではないかもしれないけれど、そこにある種のかしこさがあるのではないかと、僕は思います。自分が生活しているなかに、食物が生産される場が見えていたほうがいい、そういう強い信念というか、ライフスタイルをデザインしようとしている。そこにやはりかしこく住まうという意思を感じます。

馬場　生きることに対する欲望がダイレクトに、家のデザインと結びついているという感じですね。

小泉　住居のデザインというよりも、生活をデザインしているんですよね。そこが僕にはグッときました。

バスキッチンの家 *fig.5*

小泉　こちらはマンションのリノベーション。ライフスタイルというよりも、ライフステージを意識した設計です。

馬場　10年間と期限を定めて、その間だけ住めればいいと割り切ると、住居の可能性が大きく広がる。そんなことを示

fig.6
カウルハウス
比護結子＋和田七重＋柴田晃宏（ikmo）
>> p.36

fig.7
minomushi house
加藤陽介（一級建築士事務所 楓設計室）
>> p.26

してくれる作品です。住宅をドライに流動資産としてとらえていますね。水まわりをバルコニーがある窓側に移していますが、こういう大胆なプランが可能になるのも、あと10年しか住まないから。

小泉　団地などにも40㎡くらいの小さな住戸が大量に存在しています。それをこれからどう生かしていくか、というのは重要な社会的課題です。2つ分の住戸を1つにつくり直して広くするなどの改造を行っている事例もありますが、そういう大規模な改造を行わず、狭い住戸のままでも、子どもがまだ小さい夫婦だったら十分です。そのままで使いこなせるなら、それでいいわけです。

馬場　マンションや団地の住戸は、一般的多数に向けてつくられてきたので、家族はだいたいこういう風に生活するものという前提があって、その最大公約数的なプランを供給していました。今でも基本的にはそうですね。大手ディベロッパーがマーケティングによって、一番安全でリスクの少ない設計を行っています。でも特殊な間取りの住戸が売れ残るかというと、そうでもないんですよ。むしろ人気があったりする。

小泉　1つしかないプランは、それを気に入る人が1人見つかればいいわけですからね。

馬場　そうなんです。そうした最大公約数的ではない住戸をつくっていくことが、リノベーションによって進んでいくのかもしれませんね。

小泉　今の日本は、既に十分すぎる数の住戸があります。そのストックをどう活かしていくかを考えていかなければいけない段階に入っているのですが、この住宅のような、賃貸の身軽さと所有の重さの中間ぐらいの、10年所有というやり方は大きな可能性がありそうです。

馬場　10年が過ぎたら、その後は賃貸にすることを想定しているんですよね。あるいは売れば買い手がつくかもしれない。

小泉　リノベーションの費用を考えても、十分に元がとれそうです。

馬場　経済的にも合理性があるかしこさですね。R不動産のウェブサイトで紹介したら、これ絶対に人気出ますよ（笑）。

カウルハウス *fig.6*

小泉　多世代がずっと一緒に住み続けられるようにするにはどうしたらいいか、きちんと考えてそれに応えた作品。住宅を一生住むものと考え、歳をとっていくことを予め想定してつくっています。

馬場　前の作品と対照的ですね。

小泉　どちらも大事なことですし、どちらもかしこい。こちらは重いテーマだけれど、その重さをあまり感じさせないデザインになっているのがいい。

馬場　複雑な家族構成が、さわやかに解けていますよね。

小泉　回遊できる動線が考えられていて、行き止まりがありません。多世代が住む家を、ツリー状で枝分かれした平面にしてしまうと、住む人が孤立してしまう気がします。来客時にも気兼ねせず動けるよう動線がループしていて、どちらまわりでも行けるようにしておいたほうがいい。それに高齢者や、車椅子を使っていると、行って戻るよりは、ぐるっとまわったほうが楽ということもあります。

馬場　この家は2階があって、そこにおばあさんが上がるのは難しいかもしれません。でも吹き抜けを介して姿は見えるから、孤独にはならないでしょうね。バリアフリーでなければいけないところはしっかり対応して、そうではないところは思い切って段差をつけてしまう。メリハリがしっかりできていると思います。

小泉　年齢の違う人が一緒に住むときの微妙な距離感がつくれている。そんな気がしますね。

minomushi house *fig.7*

小泉　廃材を使って家を建ててしまっています。

馬場　現在、空き家となった木造の住宅が増えていますが、地方都市ではそれ

fig.8
passive/active
川上堅次（エトラ）
>> p.44

fig.9
Haco
木下昌大（KINO architects）
>> p.46

が再利用されていません。人口が減っていくので、今後もその傾向は続くでしょう。そのときにただ壊してゴミにするのではなく、その部材を再流通させたらいいのではないかとは以前から思っていました。それを表現として全面的に押し出した住宅が実現しているのを見て、びっくりしました。

小泉　廃材だけではなく、流木なども使っていますね。こういう材料の活用は、建設時の環境負荷を抑えることにもつながっています。

馬場　そういう意味では、「環境」のテーマにもかかわっていますね。

小泉　平面はシンプルですが、ある種のすがすがしさを感じます。ヘンリー・D・ソローが『森の生活』で、自分の丸太小屋を建てるときに近くの納屋の部材をもらってくるという記述があって、こういうやり方は昔からあるといえばあるんですよね。

馬場　石山修武さんは工業製品の組み合わせによって住宅をつくろうとしていましたが、これはさらに進んで、いったん役割を終えたものをもう1回、流通させて使おうという次のフェイズに思えます。建築のストックというのは、空間のストックであるだけでなく、部材の集積としてのストックでもあるかもしれない。それを端的に、しかも挑発的に表現した住宅ですね。

小泉　「かしこい家」を考えるとき、建設プロセスのかしこさというものもあると思います。これは「Haco」（fig.9）と並んで、そういう事例でもあります。

type 3
リノベーション

passive/active　*fig.8*

小泉　次は「リノベーション」をテーマとした作品群です。このうちの1つは「ライフスタイル」にも該当して既に触れたので、主に残りの2つについて触れます。

馬場　リノベーションという手法が注目されるようになってもう10年あまりになります。その手法に関しては、もう出つくしたかとも思ったのですが、こうして応募案を眺めると、まだまだ新しい手法があるなと気づかされますね。

小泉　この作品は集合住宅のリノベーション。縁側状のバッファーゾーンを設けて、熱をため込んでいます。集合住宅のリノベーションだと、基本的に躯体や外皮をいじれないので、環境的な面を改善することがなかなか難しいのですが、これはうまくやりましたね。

馬場　階高が限られているので、そのなかで空気の流れを上手につくるのはたいへんなのですが、ここでは空調された空気を、床下を介してまわすことで実現しています。普通のエアコンでやっているところもいいですね。

小泉　土間スペースの使われ方も楽しそうだし、限られた床面積のなかに気持ちのよさそうな場所を、無理なくいくつもつくっていますね。なかなかかしこい。

馬場　リノベーションの新しいアプローチですね。

Haco　*fig.9*

馬場　よくあるタイプのマンション住戸を、家具と建具の中間みたいなものを配置することでリノベーションしています。家具システムのような提案です。

小泉　ユニット化されたハコを持ち込むことで、いろいろなことを解決しています。水まわりや部屋の位置は実は変わっていないにもかかわらず、劇的に変わったように見せています。このやり方は汎用性がありそうですね。

馬場　構法をテーマにしているとも言えますね。

小泉　この手法がすぐれている点は、ハコを工場でつくれること。建築は基本的に現場でつくるもの。それを省力化しようとしてプレファブの技術が開発されてきたけれど、内装でプレファブ化した例はあまり見たことがない。躯体が既

fig.10
長岡の住宅
石井大五（フューチャースケープ建築設計事務所）
>> p.18

fig.11
ホワイトアトリウムハウス
小山将史
（一級建築士事務所 小山将史建築設計事務所）
>> p.24

fig.12
béret（ベレー）
三宅正浩＋吉本英正
（y+M design office一級建築士事務所）
>> p.14

にあるので、そこで内装工事をやるしかないと考えるからですが、こうするとオフサイトでもできる。効率がよくて、端材も出にくくなるし、そういうところも含めてかしこい提案です。

type 4
環境

長岡の住宅 *fig.10*

馬場　「環境」をテーマにした作品群に移りましょう。

小泉　この作品は、生活のゾーンとは別にロフトの階があって、積雪時でもその内側を反射しながら入ってくる光で奥の部屋まで明るくしようというアイデア。

馬場　ロフトが光のレシーバーになって、建て込んだ周辺環境にもかかわらず、うまく光を採り入れています。

小泉　格好もいいですよね。環境のための工夫が、きちんとスペースとしてできている。

馬場　ロフト階はどう使っているんでしょう。光をしっかり採り入れるためには、収納スペースとしては使えませんよね。

小泉　こういう未定義な場所が家のなかにあるということが大事なのかもしれませんね。「かしこい家」は無駄な空間をなくす方向に行きがちで、「狭小」をテーマとした住宅などはそうならざるを得ないところがありますが、この作品のように地方都市にあって面積に余裕がある場合には、未定義な場所があって、それがいろいろな役割を果たすほうがむしろいい気がします。昔の住宅でも、縁側や床の間が空間的な広がりや移ろう季節を感じさせる効果を生んでいました。

ホワイトアトリウムハウス *fig.11*

小泉　こちらはシェルターのような外観。ボールトの形は容積あたりの表面積も少ないし効率的です。なかにはもう1層のレイヤーがあって、そこで光を受けたり空気を流したりしています。

馬場　二重の外皮が、断熱だけでなく空調空間にもなっているんですね。

小泉　快適だと思いますよ。

馬場　寒い地域でエコハウス的なものをつくると、防御一辺倒の住宅になりがちですが、これは内部空間が柔らかくできていて気持ちよさそう。

小泉　重苦しくせず、人間に近しい感じにしようという配慮が感じられますね。

馬場　「環境」で選ばれた作品は、ひとつは新潟県で、もう1つは北海道。どちらも気候条件が厳しいところです。自然環境が厳しいと、「かしこい家」である必然性が出てくるということでしょうか。

小泉　暑い地域の住宅もあるとよかったですね。

type 5
周辺との関係

béret（ベレー） *fig.12*

小泉　これは大きな屋根をかぶせて、その懐に深い中間領域をつくった住宅です。

馬場　不思議な建物だなと思いました。一番外側に立っているのは壁だろうか、塀だろうか。それに囲まれた微妙な空間も、路地と呼ぶべきか、通路と呼ぶべきか。土間のようでもありますし。定義しにくい空間を、屋根で囲うことでかろうじて家として成り立たせています。

小泉　環境に対してどう向き合うのかを考えたときに、建築の外壁1枚で解決しようというやり方がありますよね。しかしそれは、防御性を強める方向にしか向かいません。それはあまりかしこくないと思うんです。一方でこの作品のように何枚かの層を設けると、それぞれが少しずつ力を発揮すればよいので、しなやかな環境との付き合い方ができます。

馬場　この場所に佇むとどういう感じがするのか、興味が湧きますね。

小泉　大屋根で全体を覆うというのはほかの住宅でもいろいろやられていますが、これは壁だか塀だかわからないものが領域を決めている。そこが強烈な

んですね。

マチノキ *fig.13*

小泉　オブジェ的に自立していて、外との関係を拒絶した感じが少しある。その一方で内部は吹き抜けがあって開けています。周辺のとりとめもない風景を見ると、ヘタに外との関係をつくるよりは内側に世界を構築しようとしたのかなと理解しました。

馬場　周囲との関係を模索していますよね。

小泉　谷状の敷地なので、上から光を採ろうとした面もあるでしょうね。

馬場　個人的には少し外に対して閉鎖的すぎないかとも思いますが、こういう囲まれた空間に安心する人もいるでしょうね。

小泉　内部空間を巡るシーンの豊かさと、ここに暮らす人同士が柔らかな関係を築けそうなところがいいと思いました。

八ヶ岳の山荘 *fig.14*

馬場　対照的に開放的なのがこの作品。

小泉　周囲の環境がよいので、外に向かって思い切り開いて、光や風を採り入れています。

馬場　ゆったりと開けた敷地に建てると、こういう素直によい家ができる。そのお手本です。さわやかな家。

小泉　自然の眺望、太陽の光、吹き抜ける風、そういったものをストレートに活かすというのも、1つのかしこさですよね。この対談では、最初に特殊な条件の狭小住宅を採り上げましたが、最後は期せずして王道のような作品で終わる（笑）。

fig.13
マチノキ
半谷彰英（半谷彰英建築設計事務所）
十諏口志保（ウタグチシホ建築アトリエ）
>> p.16

fig.14
八ヶ岳の山荘
森 清敏＋川村奈津子（MDS）
>> p.12

馬場　ゆとりのある敷地に立つ住宅は入選しなかったほかの応募作にもありましたが、この作品は周辺の環境に対して、方向性を限定せずニュートラルに向かい合っているので、豊かな可能性を追求し切れている。そこもよかったです。

小泉　しなやかな感じがしますね。場所に即したかしこさがあるということ。これを都心の狭小地でやるのは無理がありますから。

明らかになった住宅の可能性

小泉　何が「かしこい家」なのかは、一言では表わせないということです。一律にこれがかしこいとか、これよりこれがかしこいとかは比べられない。与えられた条件に対して、創造的に解いていくところにかしこさがあるのだと思います。条件が厳しいほうがかしこさが見えやすくなると馬場さんが言っていましたが、そこにかしこさの本質があるのかもしれません。

馬場　状況にどのように対応して住む場所をつくっていけばいいのか、その可能性を明らかにできたという意味で、このコンペは意義があったと思います。現代の住宅をつくるときに考えなければいけないテーマが出揃った感じもありますし。

小泉　スマートハウスとかIT系の住宅作品が多くなるのかなと思いましたが、そうではなかったですね。

馬場　意図的に落としたというわけではなく、応募自体が少なかったですね。機械的な技術で解決するよりも、複雑な条件に対して、建築の設計でていねいに応えていくという住宅が多かった。

小泉　機械に頼りすぎると、敷地や居住者に応じた個別の対応が取りにくくなる面がある。スマートフォンのOSが最初から共通に提供されているように。建築というのはそういうものではない。そこにかしこさが表れるんですね。

文／磯 達雄